

昭和13年6月1日（水）

薄曇り棚引く、併し暑氣強し。五拾円払戻す。五円余、保険費受取る。飯塚市産業課長たりし人来局。唐原の人、今は自家に居ると云ふ。内袋求め佐世保に発送す。貢氏より照会の問題に関し、其の儘移牒せしものとす。四時三十分発、行摺行き43銭、六時来著。此日暑熱甚だし。流汗淋漓。卵五銭と称す、三個求む。蚊三、五匹。夜、降雨す。

昭和13年6月2日（木）

曇り、霽れ模様。八時十六分発、九時前着。二円泊料、一元茶菓料。此日料金調票発送済み。気温降下。為替現金百円過剰。午後五時三十分まで居残り、病院を訪ふ。冷氣に対する湯煖房の調節、不可と認め整え正す。六時十分出発、途中守谷氏と逢ふ。過剰金発見せずと云ふ。一日朝求めし鯛の小形煮付け、食膳に供さる。十時寢床。久子は九時前に寢床。天気は晴れたるも冷氣。昨日に比し、余り急テンポの下降方なり。

昭和13年6月3日（金）

晴れ。松原氏より回報あり、其の儘貢氏に発送。午前九時半頃、福岡振替より百円不足、局報あり。是れにて事故判明、愁眉を開く前、猶巖に参拾円交付。朝、姉や来たり参拾円貯金払戻し方申出づ。余の懷より遣わすよう話して販らせしを以てなり。午後五時病院行き。熱三七、一・二分、氷を当てて居る。猶腹を押せば痛しと云ふ。嬰兒は乳飲み方寡少、元氣なく眠りて居る。泣くこと少なしと云ふ。六時十五分、帰途に就く。巖、久子和博を連れ行違いに病院を訪ふて、九時四十分頃販る。余蚊帳に

入りてから訪ね来る。

昭和13年6月4日（土）

貢氏より来信。堤より来翰により佐世保より返事ありし為、安神し呉れと云ふ意味を、余に移牒し来れるなり。昨夜冷氣、快晴。切手請求、久子居残る。午後一時二十分出發。永江氏切手請求に中津局に行き、余出發間際まで販来せず。其の儘出發す。牛乳配達を受けず、何日も一時半頃配達を受くる例なり。定時発車、午後五時に二分前自宅到着。中尾氏来たり居らる。昨夜叔母を迎えに来たり、序でに立寄られ一泊されたる由。此日は六時四十四分、蓑島発にて唐津に行かれる趣。余は夕食一緒にし、六時より同氏を送りて出發。高宮まで歩む、同駅より鳥飼まで8錢、乗車。爰（ここ）にて別れ、余は城西橋まで電車路に沿うて進み柳原先生宅に至る。七時二十分、昨今八時開会とし居れりと仰言る。古井農商学校の先生二名を連れ立ち出席、八時より行事。ぽつぽつ会員集まり来る。松尾氏、福永氏、桑原氏、志波氏等同人の参加多し。外女性二名、高工教授某氏あり。柳原先生より、各方面より今度のまこと誌の感銘に付き、葉書や書面による文章を読上げ意見を附し下さる。午後十時五十分頃散会。電車には同人全部乗る。桑原氏より「須藤氏より依頼の品物を届けねばならぬ」と謂わる。十一時販宅。曇天。

昭和13年6月5日（日）

風強し。20錢にて夏蜜柑を求めしむ。頃日のは直ぐ腐敗する嫌いあり。新聞を見る。朝、前の家よりヒシ巻を貰ふ。正午桑原氏来宅。須藤氏より自祝のハンカチらし

きもの頂く。今朝貰ひしヒシ巻を出す。夏蜜柑を砂糖を入れて出す。一時間計り色々話して販らる。此日、頗る暑し。じっとして居ても流汗淋漓す。猶も早く休む。蒸し暑し。

昭和13年6月6日（月）

朝の内、加なり暑かりしも夕方より冷ゆ。須藤氏に礼状を、広美に申訳状を出す。明日出発の準備す。髯剃りぬ。

「四日の柳原先生邸の会合にて、今回初めて献金袋を廻す。余拾銭寄進す。」十時過ぎ寢床。開襟襯衣（はだぎ）、昨年求めたるを搜索せしも見当たらず。其の為、時間を徒費す。嘗（かつ）て二郎より洗濯して呉れと申越したる銘仙を、今回巖に送ることとなる。

昭和13年6月7日（火）

午前一時、中尾氏久保田より来らる。澄子起きて門扉を開く。余起きず、朝四時二十分起床。昨夜喉乾く、水を突き当たりの伯父さん家より貰ふて飲む。其の為、夜中数回起きる。朝三時頃も起きたくなる。我慢して漸く前記時刻まで耐えたり。中尾氏来邸の為、遂に中津行きを見合わせ。同氏、巖木邸にて饗応ありし馳走持参。小城羊羹二本土産に持参さる。九時より松屋に至り、文目（あやめ）漬け百匁三十銭。峯氏及び中尾氏へ各四百匁、大阪へ三百匁、計三匁三十銭。送料五十二銭支払う。開襟麻袖付き三匁、及び中津ビスケ三十銭求め、博多駅に。十時三十二分発に三分程遅れ、一時間待ち合わせ。十一時二十五分発にて福吉（成子さん実家）に立寄り、皆瀬行きの筈。余は簗島下車、帰宅。昨年求めし蚊帳を試みに吊り見る。八畳吊りなり。雨降る、三十分間

計りにして歇む。冷氣漸く漲る。夜飯は中尾氏土産の鰻、鯛等、煮直して頂く。曇天の儘、暮れ行く。

昭和13年6月8日（水）

未明より降雨。夜明け次第に歇む。朝パン食。定時土産品黒潮一缶、ビスケー包み30、小城羊羹一（これは久子と女中に折半）、夏衣巖分に縫い直し、是等を携行。徒歩、二十分前駅に着く。新聞六銭を求め、定時発車。五時帰る頃ポツポツ降り初む。和傘借り帰る。遂に翳す程に至らざりし。久子居り、女中は前夜より附添と交代。悦子を負うて外出、鎮守森を経て一週し来る。

昭和13年6月9日（木）

昌江より書面。胃癌及び咽頭癌の由、昨日申越す。夜半より降雨。朝、雷鳴豪雨覆盆の概あり。永江氏より借用の和傘と共に一本さしかけ出勤す。午後五時病院を訪ふ、姉や炊事に従事。雨歇まず。朝吹氏も見舞いに来たり、病院を訪ねらる。六時半頃辞去。夕食も余の為に巖も待ち居る。悦子優良児中に加わり、明日再審査施行の由。無帽にて往復せしも可なり暑く、汗流れ夕食後水浴。殆ど終日雨の為、飯宅後外出せず。

昭和13年6月10日（金）

朝雷鳴、昨朝程にあらず。雨も少々降り八時出発。午後次第に霽れ陽光を見る。午後五時病院を訪ふ。愛子痔が悪く痛み甚だしき由。夜、安眠し得ざりしやにて仮睡し居る。三時頃悦子再審査にて連れて来たりし由。和博は姉やが伴って来たり。此夜泊めて遣るとのことなりしが、今夜防空演習にて燈火管制故、泊められぬと云ふ。巖、

連れに寄越して呉れと云ふ。余連れて販る途中、脚痺れるとて負われたがる。六時二十五分帰宅。夕食後新聞を見る。和博も来たり闇無社に行く。

昭和13年6月11日（土）

朝より快晴。出勤前神社に散歩、和博に従ふ。二十分遅れ出発。次第に曇り。午後四時半病院を訪ふ。五時半降雨、少時して小降りとなる。六時出発、帰途に就く。途中雨漸く繁し、濡れぬ裡こそ露をも厭え、濡れて終わっては稍（やや）自暴自棄となる。六時二十分帰宅。洋服を乾燥す可く、巖自分の座敷に持込む。間もなく夕食、十時寢床。雨甚だし。

昭和13年6月12日（日）

曇り。傘を持たず八時出発、駅に至る。守谷さん待居る。八時二十七分は改正前の時間にて、九時五分発車と云ふ。一先ず局に帰り、余は髯剃りに日の出町局の並びの美髪店に至り、顔剃りす20。午前八時四十五分局に至り、守谷さんを連れ駅に至り、羅漢寺まで往復二人1,44銭、片路一名45銭二割引とす。是れは往復を求むる場合に限るらし。定時発車、九時四十分着。女子八名あり、相当賑わう。一つ松長も来る。十時開会。各局一二類事故により疑義を質し、午前中大体終了。昼飯の馳走を受く。事務員に限り旅費客費を交付さる。午後三時五十一分発にて帰る。余、柿羊羹20銭を求め、四時三十分到着。雨降り初む、三共の隣の傘屋にて和傘2,00にて求め、翳して販る。和博土産の何なるかを尋ぬ、食物に就いては敏感なり。六時夕食、新聞を見て十時寢床。巖子供に馬穴に湯を入れ、其の中に浸して洗って遣る。皆汗かき

居る故、巖に注意せしなり。今日の大朝大分版に、悦子健康児の二番に入選の旨、報導あり。切抜きとして参考にせしむ。十五日頃受賞ある由なり。一等六人、二等十二人と覚えし。

昭和13年6月13日（月）

朝豪雨、出勤時殊に甚だし。巖、余より一足早く出発す。参拾円貯金払戻し方、余に依頼す。小柳氏より葉書、催促越す。三時頃歇み、偶々陽光を拝す。小柳氏に返事を出す。気温涼し。午後五時病院に愛子を訪ふ。降雨歇まず洪水の地方多し。嬰兒、乳幾分多量飲む如し。愛子、痔痛多少減退したる様子。六時十分飯途に就く。三十円払戻し金は愛子に渡す。六時半飯宅。両児夕食を済まし、七時早く両児を寝かす。十時寢床、ラジオ舞台劇を聴く。

昭和13年6月14日（火）

朝来降雨。八時十分出発。朝吹氏、昨夜七時頃まで霖雨中を活動。今朝頭痛欠勤の旨、妻女来訪あり。今日千円を据置せんとする者あり。国債を購（あがな）わしむ。500円一、百円五、貳拾五円一、計七枚。午後五時愛子を見舞ふ。六時二十分辞去。雨少降りとなる。夕方より幾分小歇み。久子両児を連れ風呂に行く。七時飯り来たり、夕食を頂く。

昭和13年6月15日（水）

朝降雨。午後三時頃より碧空を見、陽光を仰ぐ。次第に空晴れ渡る。連日の降雨にて山崩れ鉄路埋没。列車顛覆に依る死傷二百余名を出せし惨事あり。昨嬰兒信子、前夜一睡もせず泣く、原因不明。余行きし時は安眠し乳

を飲まず。今日は如何にやと案じ居る。昌江宛封緘葉書
発送。今朝、朝吹氏休養。巖八時出発、二人分働くと称
し居れり。午後五時より病院に至る。信子昨夜は良く眠り
乳も吞む。愛子昨夜梯子を上下し、其の結果戦慄を覚え、
後発熱、腹部再び痛み氷嚢を当て居る。六時辞去。雨
歇む。六時半帰宅。悦子の賞状授与式、二十日午後一
時公会堂にて執行の旨、市長より通知ありし由。七時悦
子を負うて社内を一巡、四十分帰る、八時寝かす。

昭和13年6月16日（木）

朝珍しく晴天、午後より次第に曇る。降雨したるも間もな
く歇みたるも、再び陰雲となる。此日も千円余、国債売
れたり。午後五時病院に愛子を見舞う。矢張り氷嚢を用
い居るも、熱は三十七度となるとあり。嬰兒も元気、障り
なし。六時十分辞去。女中乾物に帰宅せりと云ふ。雨降
らず、降り相にも見えず。夕食後、悦子負うて社内を巡り
て七時四十分帰る。巖帰り遅る。

昭和13年6月17日（金）

快晴。時に曇るも、雨は全く上がりし気配。五十円国債
一枚売れ、栄町局長来たり三十余分居り、正午帰る。少
額国債を大券と交換方申出でたるなり。余の方でも少額
には持剰（もちあま）し居る旨話したり。午後一時前、
牛乳持参、同二十分出発。久子より委託の風呂敷包み持
参、五時二十分前到着。列車内陽光射す処、頗る暑し。
夕食後髯剃り。午後七時のニュースを聞き、七時半出発。
徒歩、八時到着。会場座敷は南北西と三方開放、仏壇
は黒檀、座布団を提供さる。行事終わり、星野先生少女
御作法習い来たり。宴習の積もりで茶を薦め斡旋さる。

令夫人同断、看護婦女中五名も末席にて聴聞す。此日の桑原氏の書記したる感想文は、実に感心せり。下関の白衣の天使も直接其の人に手紙を発送し、其の返信に接したるを披露され、一同を感心せしめらる。十一時過ぎ散会、徒歩帰宅。献金一円八拾錢、例により各位拾錢、星野先生五拾錢と思わる。十二時帰宅。

昭和13年6月18日（土）

午前中晴天。此の朝、四時起床。普段より早き心地す。午前中睡きこと甚だし。昨夜柳原先生より、明日真の郷例会を行う旨、余の参加を慫慂さる。昨日は先生御夫婦を始め、星野先生、延封寺さんの三夫人も夫と共に列席され、将来共是非家族を連れて参加を希望する旨、御話あり。此日午後より靄（もや）満天を蔽う。降雨の兆あり。布団乾して貰ふ。昨集金の拾円九拾錢（内拾錢は前月分）簗島局にて貯金す。岡田光邦より葉書あり。谷部隊に元気に活動し居る由。松木氏も上海に居ると云ふ。中支は既に炎熱百度を超すとあり。午後七時二十分出發、雨時々降り来る。川岸まで行きたるも引返す。和傘持出し再び出掛く。渡辺通一丁目に至れば、剩す処二十分、城南線高等学校前にて折返す。次の電車も同様、更に次のを待合わす。其の為大分遅れ、八時に四五分剩す積もりを反対に五分間遅刻、行事始まり居る。会員拾一名の参加あり。先生より広島某少佐を中心として話あり。十時二十分閉会、粽（ちまき）の馳走を受く。城戸某氏、先生郷里の母堂より頂けるものなりとて、私にも土産に頂く。十一時半到着。和傘持行きたるも、往くも復るも降らず。中間多少時雨たる如し、和傘御共とす。

昭和13年6月19日（日）

曇り、幾分冷ゆ。岡田に返事認む。秀夫四時過ぎ来宅。余と二階にて話し、更に道子と話す。夕食を餐しやる、六時半飯る。道子跡をつけて行ける如し。余両日間、夜遅くまで朝は早く起き、幾分疲労の気味なり。九時寢床。曇天の儘、終始す。

昭和13年6月20日（月）

朝より時々降雨、本降りに不至。今日は市場は割引日として、うどんソバを購入、夜食に充つ。明日中津に行くことにし、午後二時剃刀等磨研す。夕食後、澄子に理髪を頼む。髯剃りす。夕方より細雨。

昭和13年6月21日（火）

四時二十分起床、京大開襟ワイシャツ、中尾氏と松屋より先日求めしを着用。麵包食を喫して七時半出発。徒歩、久子へ品物を携行、駅にて新聞を求め定時発車。曇り、後晴れ。五時過ぎ帰宅。注文の旭革靴を持ち帰る。十一文にて余り大き過ぎ、返送することにせり。夕飯後、悦子を連れ神社に至る。悦子の健康児表彰は去る二十日、午後一時より公会堂にて開催。銀メッキメタル、賞状及び賞品は医師会より赤子の肌着一着。夕刊を見て九時半床を展べ、十時寢床。昌江よりの手紙によれば、生長の家を見て元気に活動し居るから、態々来佐の要なしとあり。中尾氏より十六日附け手紙あり。其の後の模様詳述しあり。巖、塩湯に和博を連れて行く。

昭和13年6月22日（水）

晴れ、薄靄かかり居る模様。午前十時秋永鶴居長、国

債百円五枚持ち来らる。小額は本局にて売捌き呉れ、全部売竭（つく）したる為、売捌き不向きの分を持来られし如し。午後二時三十分本局行き。木下君出張、二十五日帰局の由。物価労銀調べを調査に行きしも、木下君不在の為、要領を得ず。保険にて上原君に新規契約と同時に予納する根拠を質し、小野本君に日満電報料金中疑義あり、為替より証券保管請求用紙を貰ふて帰る。午後五時より病院に至る。愛子起きて居る。平熱二三日間続く由なるも、猶押せば腹部痛むと云ふ。階下に降りることに付き、先生に相談せしに明日にせよと謂わる。待遠しと申し居れり。嬰兒に変わりなし、六時帰る。夜食素麺、悦子に養ひ呉る。神社に行く。悦子、久子が連れて風呂に行く。巖も来たり神社より引返す。八時子供等、寝に就く。余八時半水浴の後、新聞を見て十時寢床。

昭和13年6月23日（木）

朝悦子の要望、徒歩、神社を廻りて八時十五分帰る。途草を採りてなかなか時間を費やす。社境内に至れば必ず大小便を告ぐ、此朝も大便す。家の前より跟いて来たりし狗（いぬ）が、半分舐めて終ふ。帰りにバラ苑摘ますバラも、既に盛りを過ぎ退色し清鮮なるは少なし。雨ぽつぽつ降り初む。出勤時頃は歇む。傘持来たらず、後遂に降り出す。午後四時五十分退局。病院を見舞ふ。階下に降りたるも異状を認めず。二十五日退院の意思を語る。雨益々強し、永江氏より借用の和傘役立つ。夜巖、葉書に認めたる道子宛を示す。久子の涙ぐましき働き云々と心にもなき文句あり。之を非難したるを久子聞き、悲憤措かざるものの如く、遂に曝発泣くこと甚だし。十時、余の傍らに招致し懇示す。余の心平らかならず。未だ以て

誠意の足らざるもの多きを認め、忸怩たらざるを得ず。
十一時寢床。

昭和13年6月24日（金）

朝降りそうで降らず。悦子和博を連れ社内を巡りて八時十五分帰宅、出発。巖より二郎に、三十円送金方申遣りたるも返事なしと云ふ。多分右金なければ病院への支払い出来ぬものと思料す。午後零時過ぎ印紙百円参枚、拾円五枚の為、余中津局に赴き、印紙のみ持来る。百円請求の西野に持行き交付す。四時頃より雨少し歇む。六十二円夏期慰労金到着。永江氏28、守谷氏18、是永氏16分配報告す。此の朝痔出血。昼汚す、巖に拭わしむ。着衣には異状なかりし。午後五時二十五分前退局、病院に至れば巖居る。朝吹氏も見ゆ。荷物を自転車に附け、不用の分を運ぶ積もりらし。余一足早く帰りしに、巖の方早かりし。

昭和13年6月25日（土）

曇り、多少の降雨。和傘持参、午後より霽れる。此の朝久子二十六日帰ると云ふ。余は来週余と共に帰れと謂えば、巖ちゃん承知し呉ると謂ふ。後巖より久子返すべきやと尋ぬ。余は久子より其の事を尋ねられたる故、来週余と帰れと云えば、既に巖ちゃん承知せりと申居る。承諾を与ひぬ前、余に尋ぬべきに非ずやと反問す。十一時中津銀行出張所、駅、中津信用組合十七銀行より中津局に至れば、午後零時半、木下主事に労銀調書一覧を覓（もと）む。電話主事と木下主事と電話開式に付き、熊本に出張せし由。該書類、所在不判明、其の儘帰局。秋永氏臨局。恰度五百円国債要求の人あり。永江氏其

の人の宅に至り、不足二枚を鶴居局代理持参せしめ、売捌きたる由。五時皈宅。恰度愛子帰宅、タクシーにて荷物を附け無事到着したる所なりし。此日も日中出血、禪を汚す。為替一時間延伸。

昭和13年6月26日（日）

此日貯金、保険年金受入れ事務のみ取扱ふ。自午前八時至午後四時。八時十五分出局。快晴。昨日の調査を受けて、守江局長宛回答を発送す。当局及び栄町局に対し、同一事項を同一会社銀行に調査するは、対手をして其の煩に堪えざらしむ如し所は、甚だ遺憾なりと注意せり。中尾氏宛返信発送す。久子便所掃除、血滴り居りし旨謂ふ。夜禪洗ふ。巖の意向にて久子、女中を活動写真館に遣る。其の為久子帰宅を延ばす。余の足袋も洗濯し呉れたる等、気の利いた活動をしたるは特筆に値すべし。夕方巖も一緒に神社に至る。鯉の餌に麩（ふ）四錢求む。両児、久子女中に連れられ風呂に行く。佐藤道貞氏、長崎局長に栄転の新聞報あり。明日、巖釣り魚に行く由。

昭和13年6月27日（月）

快晴。旭革靴到着。鶴居局代理臨局、国債代金受取りに来る。為替現金不符合。午後五時半、猶不符合の儘、余帰宅。革靴持帰る。六時半夕食。巖七時半頃帰宅。相当の収穫あり、軽く炙り焼。悦子を連れ神社に至り、一巡して帰宅。給料分配、拾円巖に遣る。百三十円交付あり、靴代差引ける如し。

昭和13年6月28日（火）

曇り勝ち。革靴を穿きて出局。十時印紙買受けの為、中津局に行き、郵便部に貯金通帳多数発行の為、拾余名動員援助し居るを見る。当局郵便係の事故多きを攻撃す。曰く書留速達に対し速達料金を徴収しあらざりしこと、書留通常代引き返戻しに際し、小包と一緒に小包として発送せしこと等、申居る。四十分以内に用弁を終えて印紙を交付する約束故、気が揉めて斯かる御託を聞流し、二階に至り手続きして貰ふ。高額は局長の認印を要することとて、割合手間取り、恰度一時間を費やせり。次いで桂川より発行せる為替証書参百円は、後藤寺局払渡しのものなりしを、誤って昨日払渡したるが、此日後藤寺より当局払渡し指定の分を送付越しあり。取換えて遣ることになり、余、中殿町小形某氏を訪ふ。材木屋にて直ぐ分かり認印を貰ひ帰る。昨日、現金不適合問題は計算違いなりしと云ふ。四時頃より晴天。五時近く帰る。此日、赤子湯浴せたり。

昭和13年6月29日（水）

曇天、多少降雨。和傘持参。九時頃より歇み、西北の空は晴れ勝ちなるも、東南方面は険悪の模様を呈し居れり。台風八丈島附近に在り、中心より三百軒（キロメートル）以内暴風雨を呈し、警戒警報発せらる。東京附近大雨、出水甚だしき模様。午前中麻生氏臨局。鼻病、曩（さき）に福岡医大病院にかかり、頃日当地の医師に毎日来たり居らる。柏餅沢山持参、局員に馳走さる。午後四時四十分帰宅。中支出征の太田氏に返信発送せり。天気割合に好く、和傘を翳すに至らず。夕刻悦子和博と外出。風、強風程度に吹荒（すさ）み、浴衣の俣にて脚が寒さを感じ

ず。夜に至り水浴す。頭痛の気味あり。風邪引きたるらし。此朝も出血あり。手当来たり分配す。永江氏28、守屋氏18、是永氏16。

昭和13年6月30日（木）

此朝も出血。何れも便所にのみ流血、他に汚穢（おわい）せず。昨三時頃より、巖海岸に鯊（はぜ）釣りに行き、夕方戻り拾尾計り釣り来る。今朝上げ膳、胡麻味噌ありし為、他に多くを要望せず。此日永江氏宅、坊さん来たり読経して販る。永江氏の養母、近頃見えぬと思ひしに、今月七日神戸の娘の嫁ぎ先に至り、未だ販らぬとあり。何日か庭を眺めて、何日迄も物思ひに耽って居る姿は淋しそうなりしが、先方の待遇さえ宜しければ、なかなか帰宅されぬだろうと見て居る。ラジオの曰く、台風は勢い衰へ懸念の要なきに至れりとあり。東海、東北、鉄道不通、人畜の死傷不少、損害の程度甚大とあり。今日も長靴に和傘なりしも、昨日同様雨も降らずに傘を持戻りぬ。愛子下痢七回、今朝起き上がれず。赤子泣き、夜安眠し得ざりしものの如し。今日保険取扱費2,49円受取る。永江氏切手請求。巖に葉書持来らしむ。今日も麻生氏来局、上がりず販らる。五時前帰途に就く。夕食前悦子連れ神社詣で中、巖迎えに来たり。夕食後、再び墓地方面に向かう。巖後より来たり。墓標により年代を考覈（こうかく）したり。元禄十四年十二月二十四日の標識を認む。墓地入口の井戸輪は石の操抜きにて、天和三年とあり。二百年以前と認む。年号にて思出したるが闇無浜神社の旧鳥居は、寛保庚亥（かのえい）三年中津総町民因例建造焉とあり、是れも可なり古い物と認めたり。暘若雨時田大有年、改寛刑省民樂無虞と石刻

しあり。前者の意味不明瞭、参拝の都度三思推考。愛子
薬を飲み下痢止まると。此夜頗る睡し。九時半を待つ間、
居眠りすること多し。ニュース聞き十時前眠る。